

千葉県栄町 「房総のむら」と佐倉市 「武家屋敷」 訪問記。

岡 哲文

訪問日、「房総の村」二〇一九年四月二十七日。

五年前の東京新聞六月十五日朝刊、「行楽道楽ガイド 学べるスポット 親子でぶらり」のコラムにて、千葉県にある「房総のむら」について書かれた記事を見つけた。ネットで検索したところ、館内にはいくつかの茅葺古民家が再現ならびに移築されている。さらに、農家だけでなく武家屋敷もある。昔の街並みを模した建物があつて、様々な体験ができることも知った。さらに、佐倉市には三棟の武家屋敷がある。通年公開のほか、年に何度か特別公開しており、ボランティアによるガイドも行われていることも知った。今まで私が見てきた古民家（移築されたものも含めて）はほとんどが農家、または家主の家であり、武家屋敷を訪れたことはないから興味が沸いた。佐倉市のホームページによると、ゴールデンウィーク期間中に特別公開があるとのこと。早速申し込みをした。成田から佐倉を経由して八日市場へ行く旅行の予定を、ゴールデンウィークに設定した。ちょうど平成から令和へ改元されるただ中でもあつた。

それから今回の旅行は珍しくほとんど雨模様だった。後述するが、唯一晴天に見舞われたのは佐倉市での武家屋敷特別公開日のみだった。おまけに冬の再来かと思うぐらい肌寒く、薄手のジャンパーを羽織りながら旅をした。いつもゴールデンウィーク頃は、猛暑に近い天候なのだが、この年は違った。

JR成田駅から土日祝日のみ、「房総のむら」へ直行するバス便がある。午前九時四十五分発に乗車して目的地へ向かった。

「房総のむら」内は「商家の町並み」「上総の農家」「下総の農家」「安房の農家」「武家屋敷」に分かれており、それぞれ一棟ずつ古民家が移築再現されている。「商家の町並み」については後述するが、道の両側を昔の商家が並び建っている。

ここは、NHKの大河ドラマ「西郷どん」や朝ドラ「ゲゲゲの女房」等のロケ地としても利用されている。入り口にある総合案内所は、二階建ての重厚な建物である。江戸時代末期の旅館を再現している。モデルとなったのは成田山新勝寺の門前にあつた大野屋旅館である。

最初に紹介するのは●安房の農家●である。この農家「平野家」は江戸時代後期に建てられた。現在の南房総市増間（旧安房郡三芳（みよし）村）にあり、主屋・馬小屋・灰小屋の三棟で構成されている。この家の特徴は「分棟型（またの名を（別棟造り）に

ある。分棟造りとは、畳敷きや板敷きの部屋がある建物と、かまどのある台所の建物は別々であるが、それぞれの軒が接していて空間的に一つのものとして使われる形式のことである。紀伊半島から東北まで、太平洋側に多く分布している。千葉県でも紀伊半島から漁師たちが伝えたものかもしれない。内部に展示してある民具等に説明書きされた札がある。地元の小学校で昔の暮らしを体験するという授業で来館するためだという。こういう状態は他の古民家園でも非常によく目にする。



『安房の農家の主屋、囲炉裏のあるかつて、掛け軸のある客間。』

次は♥下総の農家“である。この家は江戸時代中期に建てられた。成田市堀之内の名主、平山家がモデルであり、主屋、土蔵、長屋門、灰小屋、木小屋、作業小屋の六棟から構成されている。茅葺屋根と白い壁の長屋門をくぐる。ここには木製のサツパ舟が展示されている。二〇一七年六月に、埼玉県さいたま市にある「浦和くらしの博物館民家園」の「旧武笠家（むかさげ）」を取材した時にも同様のものが展示されていた。当地でも水害が多かったのだが、下総は利根川水域であり、「水塚（みづか）」といってマウンツ状の上に家を建てていたところもあった。

ここでは当日、綿から糸をとる実演が行われていた。一般の見学客も講師から実際に手ほどきを受けていた。うまく糸がとれたときは皆拍手をして歓声をあげていた。昔の生活を実体験できる貴重なシーンであった。



立派な造りの長屋門。平山家の主屋。昔ながらの織物の実演。

館内を歩いて、次に向かったのは「上総の農家」である。主屋は大網白里市砂田（いさこだ）の秋葉家がモデルである。この秋葉家は、現存する棟札によって安政四年（一八五七）の建築である。そして長屋門、土蔵、馬小屋、納屋、木小屋は市原市栢橋（かはし）の内藤家をモデルとしている。この内藤家の築も十九世紀後半と考えられる。この家には屋根裏に空間がある。養蚕の場所ではなくて、繁忙期の使用人たちの部屋である。合掌造りや兜造りでは屋根裏に養蚕のための広いスペースがある。使用人のために使う空間がある民家を見たのは初めてのことだった。またこの家には「式台」がある。式台とは、玄関とは別に籠に乗った客が、そのまま室内に入れるための入り口である。これがある家は名主等の名家であることを以前に聞いたことがある。

上総の農家の長屋門の屋根は茅葺で、苔むしている。また壁の木材にも趣を感じる。



上総の農家の外観、二階の使用人スペース、時代を感じさせる長屋門。

館内を歩いて次の建物に向かう。三棟の農家を見てきたが、次は館内に再現された武家屋敷である。翌日二十九日に佐倉市にある武家屋敷を訪問する。その前に房総のむら

の武家屋敷を見ておく。

以前、小金井市にある「江戸東京たてももの園」内に地元八王子の千人同心、溝呂木家（みぞろぎけ）を見たことがあった。千人同心は江戸時代には珍しい半士半農だった。日常は農民として生活し、年貢も納めていた。御用の時のみ帯刀をして武士として日光や蝦夷地に向かった役職の人たちであった。そのため屋敷も農家の作りだった。純粋な武家屋敷を見たのはこれが初めてであった。

この武家屋敷は佐倉藩の中級武士のものをモデルに再現している。この佐倉藩士武居家は江戸時代後期の寄棟平屋造りである。『慶応元年（一八六五）佐倉堀田氏分限帳』によると、納戸部屋番九十石取り田嶋伝衛門の屋敷であった。日常生活のための「居間」、「勝手（台所）」、「土間」等の居住空間と、「式台」や「座敷」等の客用の空間が区別されている。こういうところが武家屋敷の特徴である。また武家屋敷ならではの、座敷の掛け軸に太刀と脇差の刀掛けがあるのと、白壁に槍となぎなたがかけてあることである。また居間の鎧櫃（よろいひつ）には、当世具足という様式の鎧が入っている。ただしこれは甲冑試着の体験用のものである。

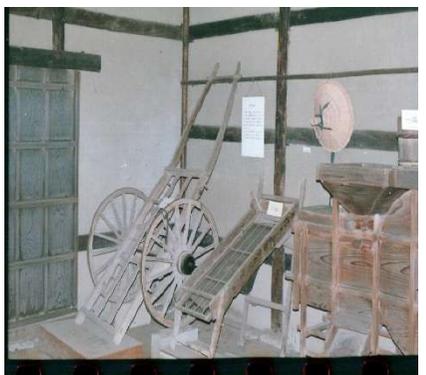
まお、座敷や居間にある調度品の多くは、佐倉藩士、または大喜多藩士が使用していたものを復元したものである。



武家屋敷の外観、すごく質素である。壁にかけてある槍となぎなた。台所。

武家屋敷を見終わり、ボランテアの方と共に出入口へと戻る。そこから次に「旧御子神家（みこがみけ）住宅」へと向かう。寄棟造りの民家である。昭和四十四年（一九六九）に国の重要文化財に指定され、同四十八年（一九七三）に現在の房総のむら内に移築保存された。この「旧御子神家」は安房郡丸山町で代々農業を営んでいた。苗字から神職関係だと思っただと尋ねてみたら、それは分からないとのこと。この屋敷は四室の部屋と土間から構成されている。炉を切った板の間の「ざしき」、板の間の「なんど」、八畳敷の「しもでい」、そして六畳の「でい」である。この「でい」に床を設け、座敷には仏壇を設けた。座敷に縁側をまわし、引き違いの板戸の内側に一枚の障子がつく。土

間からの入り口には戸棚を設けている。これらの特徴は床を張った部分と土間が一つの屋根となる、安房地方の直屋形式をとる。土間に置かれた生活用具には名前の書かれた札が貼られていた。冬みたいに寒い時だったけど、写真撮影をしていたらウグイスのさえずりが聞こえた。



茅葺屋根も土壁もきれいな「旧御子神家」外観。名前が書かれた生活用具が展示されている。囲炉裏のある部屋。

いよいよ最後に訪問する古民家は「旧平野家」である。富津市亀沢に建てられていた。昭和四十七年（一九七二）一月二十八日に県指定の有形文化財に登録された。この平野家は富津市で農業を営み、江戸時代には代々名主を務めた。ここも寄棟造りである。土間は根天井として中二階を設けた。「ちやのま」には小屋梁を受ける独立柱が立つ。「ちやのま」の北には「仏間」、「なんど」を設けて、その上手に「式台」、「げんかん」、「八畳」、「おく」の接客用の部屋を配して、来客のもてなしに重点が置かれている。そのため式台付き玄関や二間続きの客座敷の豪華さ、そして建物の四方の軒桁を全面時に出した「せがい造り」も特徴である。建築年代については、解体修理時に柱に寛延四年（一七五二）と書かれた墨書きが発見され、江戸時代中期であると判明した。ちなみに最初に紹介した「安房の農家」の平野家とは無関係である。「式台」と「せがい造り」については「上総の農家秋葉家」で前述した。この屋敷の中二階の使用については不明である。



「旧平野家」外観、玄関とは別の「式台」と屋根の「せがいで造り」。囲炉裏の部屋にある大きな機織り機。神棚のある部屋。

こうして「房総のむら」内の茅葺古民家巡りは終了した。ボランティアの方と別れて私は「商家の町並み」の方に歩いた。お昼を少し過ぎていたので、「いんば」という木造二階建てのそば屋に入った。通路を隔てた店でカルメ焼きが売られていた。おやつ代わりに購入して町並みを歩いた。この場所は旅館の外観を再現した「総合案内所」を含め、十七軒の商家で構成されている。このうち八軒の二階部分は展示室になっている。それぞれの店舗に関係ある原料や制作工程、道具などが展示してある。また日によってさまざまな「体験」や「実演」も行われている。私は泥めんこの絵付けを体験してみた。近くから子供たちの賑やかな声が聞こえてきた。何だろうかと見たら、鍛冶屋でのペーパーナイフの製作体験だった。実際に火の中に鉄を入れて叩く作業を、指導員から気を付けて行うように言われていた。焚火やキャンプとか火を使うことが余りないと思われる今の子供たちには、慎重には慎重を重ねる必要があるのかもしれない。



商家の町並み。店の中ではろうそく造りが体験できる。上総屋という呉服の店の二階展示スペース。

午後十四時になり、成田駅に戻ろうと「房総のむら」のバス停に向かった。四月一日から十一月末までの土日祝祭日のみ、十四時三十分、十五時七分、同五十七分発の成田駅行きの臨時バスが出る。バス停でバスを待ち始めてすぐに雨が降り始めた。そしてバスが成田駅に着くころには大雨になっていた。

詳細データ。 (コロナウイルス感染症拡大に伴い、情報に変更が生じています。バス

の時刻も、私が訪問した当時のものです。詳しくは URL <http://www.chiba-muse.or.jp/MURA/>。

〒二七〇―一五〇六 千葉県印旛郡栄町龍角寺一〇二八

電話番号 〇四七六―九五―三三三三 FAX 〇四七六・九五―三三三〇

開館時間 午前九時から午後四時三〇分。

休館日 月曜日。(祝祭日の場合は火曜日)と年末年始。

入館料 個人一般三〇〇円 高・大学生一五〇円。 二〇名以上の団体一般二四〇円
高・大学生は一二〇円。中学生以下と六十五歳以上、障がい者手帳所有者と介助者一名
は無料。

交通案内 自動車 東関東自動車道成田インターチェンジから成田・安食方面へ直通約
一〇キロ。

公共交通機関 JR成田線安食(あじき)駅からちばこうバス竜角寺台車庫行約一〇分、
「房総のむら」下車徒歩三分。同じく安食駅から栄町循環バスで約十五分、「ドラムの
里」下車三分。同

JR成田線下総松崎(しもうさまんざき)駅から徒歩三〇分。

同成田線成田駅西口、四番乗り場から千葉交通バス竜角寺車庫行約二〇分、「竜角寺台
二丁目」下車、徒歩。

「佐倉武家屋敷訪問記」へと続く。